京都鴨川に架かる橋の借景

川﨑 雅史

[1]正会員　工博　京都大学大学院工学研究科　教授
（〒615-8540　京都市西京区京都大学桂C1，E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp）

本稿は京都の鴨川に架かる橋の修景の一部の記録とそのデザインのベースになった考え方について記録したものである。平成16年に北大路橋の改修に始まった「橋のデザイン検討会議」は京都では初めて橋の景観設計が議論され、現在進行中の三条大橋までを含め17年の間に6つの橋の修景の方向性を決めてきた。すなわち、周辺住民の記憶や橋に対する思いを引き出し、近代から続く橋梁デザインの継承と新しい展開を含めて手探りで実施してきた。東山や北山が遠からず広く見える鴨川は、山や杜との借景が必然的に成立しており、空間的な借景のみならず、歴史的な心象風景の積み重ねによる時間的な借景も大切な考え方であった。計画から設計まで実務的なデザイナーが業務として関与しないの中で、景観設計の効率化をいかにして図り、伝統と新しいデザインの融合の足跡を残すための議論の契機にしたい。

キーワード： *鴨川, 橋, 借景*

1．風致と借景

古来から京都の景観は、盆地をつくる三山に囲まれ、鴨川や地下水の豊かな水脈の自然に基盤があることは言うまでもない。京都の景観は近代京都の成立とともに都市計画の制度として生まれた「風致」に原点がある。ただ風致の特別な区域でなくても、まちの至るところに自然景観の眺めを取り入れた「身近な借景」が存在する。したがって、新しい建築や公共施設のデザインを行う際には, 自然との重なりを常に考えなければならず、近景から遠景まで異なるスケールの広がりの中で丁寧に風景を拾い上げてその重なりを検討しなければならない必然がある。

図1　糺の杜と加茂大橋の借景（武田吾一指導）

筆者はこの十数年余り、京都市の美観風致に関する会議やデザイン検討に関わる経験を得た。そこではどの施設対象においても土木、建築、造園などの専門性を超えて、何より自然へのまなざしを大切にして、身近に潜む借景の成立に注意払いながら議論を積み重ねてきた。最後にエレガントに重なった風景が成立しなければその価値が概ね崩れる怖さも感じた。

橋のデザインにおいては、歴史のある京都の場合、三条大橋、五条大橋をはじめ、近世以前からの絵図や資料が数多く残されており、古来から山辺や町にある社寺への参道的な神聖な役割と自然風景を眺める木橋時代の原型的なイメージを頼りに、近代になって新しい素材や形態の移入とともにそれを意匠としてもどう取り入れるかという視点から橋梁のデザインが展開された歴史がある。形態のみから見れば、歴史的な基調ベースを持ちながらも、上部工の和の意匠と下部工の洋の意匠をどう融合させるかという橋自身の自律的な意匠の課題もあるが、総じてこの課題も含めて、そこに存在する個々の風景がどのように重ね合わされて外部視点でも内部視点でも、ミクロなディテールも含有する総括的な借景が成立させられるかどうか、京都市民が感じ慣れてきた橋の体験にある気配をいかに持たせるかという視点に帰着されるので

はないかと筆者は考えている。それは京都人が持つ風致の考え方や感じ方に他ならないのではないかもしれないが。

２．近代から昭和への橋のデザイン

近代においては、建築家武田吾一（京都帝国大学建築教室）や、武田の弟子であり京都帝国大学出身の橋梁構造及び意匠の設計技師である元良勲（大阪市技術者から京都工芸繊維大学）等が土木デザインを主導してきた。元良は建築出身ではあるが橋梁デザイナーのプロパーとして河合橋をはじめ多くの設計に携わった。また、田邊朔郎や橋梁構造の高橋逸夫（京都帝国大学土木教室）も参画していた。この橋梁設計を指導する布陣は大阪市の橋梁建設の萌芽期と同様のメンバーである。武田や田邊は、風致の萌芽期から京都の景観行政の指導を行ってきた風致委員会のメンバーとして参画し、その他、美術や造園の識者等で構成されるこの委員会は建築のみならず公共施設に対して風致保全のチェック機能としての役割を果たした（近代の風致行政に対する詳細な報告は現在、谷川等による今後の調査研究にて明らかにする予定である）。昭和の時代になってからも、橋梁デザインは、風致委員会がアドバイザー、またはイメージづくりを指導してきた。彼らは一貫して、近代と現代的において、素材や形態の側面を持つ橋梁を京都の歴史的な風致にいかに融合させかという点に力を注いできたと思われる。

３．昭和・平成前期の橋のデザイン

昭和中期から平成前期までに至っては、先述の美観風致委員会、川﨑清（京都大学）、池田有隣（京都工芸繊維大学）等の建築家がアドバイザーとなり、御池通りシンボル整備や橋梁の公共土木施設への意匠面での指導を行ってきた。構造計画に関しては、美観風致委員会には土木系識者や構造の専門家は当分の間存在しない時代が長く続き、市役所建設局の橋梁部署におけるインハウスエンジニアと事業関連のコンサルタントが担当した。この時期、参道の役割に当たらない位置の橋がいくつか建設され、復元的なデザインよりは自由度が高い新しいデザインの展開が見られた。しかしながら、それらも考え方は現在ある自然や歴史的な風景との借景的な考えが基盤にあることに変わりはないと考えられる（西賀茂大橋など）。そこには風致を大切に映す知恵が反映あった。

４．耐震改修を迎えた平成令和の橋のデザイン

平成の中期になって橋のデザインに対する市民意識のの大きな変化が起こった。その契機になったのが、平成14年に「橋のみやこづくりをめざして―明日の鴨川の橋を考える会の提言」である。

図2　西賀茂大橋と北山の借景（川﨑清指導）

図3　西賀茂大橋の高欄（尾形光琳の波絵から）

５．耐震改修を迎えた平成令和の橋のデザイン

平成の中期になって橋のデザインに対する市民意識のの大きな変化が起こった。その契機になったのが、平成14年に「橋のみやこづくりをめざして―明日の鴨川の橋を考える会の提言」である。京都では、平成8年にフランスの大統領の訪京を機に、市長が三条、四条間の鴨川歩道橋を提案し、翌年美観風致審議会にて承認が得られたものの、反対運動が広がり、平成10年には白紙撤回される動きがあった。この事は良くも悪しくも市民の鴨川の橋に対する初めての大きな関心のムーブメントを生みことになった。京都を語る会（梅原猛座長）の要請を受けて京都市が平成12年に「明日の鴨川の橋を考える会」を設置し、橋の基本的な機能や役割、あり方を、建築土木のみならず広く文化人も交えて議論し、平成14年に提言書をまとめた。長らくみやこを「荘厳（しょうごん）」してきた橋は、歩行者を主役とし、分断された地域や歴史、生活と自然をつなぐ鴨川を「荘厳するもの」という意味づけがなされた。そもそも「荘厳」とは仏教用語で仏堂をおごそかで立派なことを意味し、参道的、祭り行事などの役割の多い京都の橋の意味を込めた言葉であった。

そして、平成16年に橋の老朽化に伴う大がかりな耐震化工事が北大路橋にて実施されるあたり、耐震のみならず橋梁のデザイン改修の整備が始まる。しかしこのデザイン整備は、あくまで耐震工事予算の中での限られた少

額予算の中で実施されることになり、「橋のデザイン検討会議」が発足することになった。特化した景観デザイナーや専門家集団を事務局に含む体制ではなく、市役所内のインハウスエンジニア、少数の学識経験者および周辺学区の市民による検討会議である。学識経験者は「明日の鴨川の橋を考える会」の委員であり土木構造の専門である家村浩和（京都大学名誉教授）と、美観風致審議会委員でもあった筆者の二名のみであり、河合橋から土木構造の高橋良和（京都大学教授）が委員に加わり3名となった。また整備橋梁のうち、特に御薗橋は新規建設であり、検討が詳細で多岐に及び、橋梁と景観デザインの専門家である久保田善明（富山大学教授）による多くの専門的アドバイス指導を受けている。

会議では上部工であれば、高欄、照明、舗装、防護柵など要素の形や色彩に対するいくつかの代替案を示し、概ねどのようなデザインがこの場所で適正なのかをイメージパース等で議論し、概ねの方針が決まる。そして、会議終了後から、基本的な設計が開始することになるが、具体的な実施設計、施工までの主要な段階では、筆者と家村により担当課からの要請を受けて確認やアドバイスを行なってきた。この検討会議とアドバイスの体制は、北大路橋、御薗橋、加茂大橋、二条大橋、河合橋、三条大橋（進行中）の6橋梁に対して実施されている。

立ち上げ当初は、橋梁の景観設計の基本的な考え方から共有するところから始まって十分な予測やシミュレーションができない中十分な検証ができない中でも京都らしくその地域の風致を維持するデザインの継承を目指してきた。市電が走る幹線道路に架かる橋であることから鉄製の桁が数多く使用され、桁が高欄程度の薄い厚さに抑えられていることなどその特徴を知ることになった。

それでも十分といえる程のシミュレーションやチェックができたかというと難しい面もあったが、市役所内部での担当者の熱意や層も厚くなり（橋梁コンサルタント経験者）、学識とのやりとりでその後の設計が進むことになった。筆者は、橋の景観設計で基本的に注意すべきコンクリート汚れなどへの対策事項については可能な限り図面や材料の確認をしたが、京都の風致を考える上で特に意識した点は以下である。

・山や杜を中心とする周囲の自然と橋の借景
・昔の姿、近代デザイン様式（照明等）
・「石」のもつ様態・触感を活かす
（高欄、舗装における「石」の深みや肌触り等）
・眺望場所、橋詰め広場等河川空間との関係
・京都の標準仕様の利用（八角形照明柱）
・舗装パタン（方向性、自然ランダム）と素材
・自然の風致と華のある色彩
（無彩色・アースカラーと伝統色の利用）

図4　二条大橋親柱と東山の借景

図5　二条大橋親柱と東山の借景

図６　明治28年（１８９５）二条大橋
（京都百年パノラマ館淡交社より引用）

４．さいごに

本研究の今後の目的は、京都の鴨川に架かる橋の整備の検討に関わった筆者の経験、検討報告書などを振り返って、目指そうとした風景、借景とは何か、風致における美しい水辺の風景や、石の素材文化が次世代に継承するための考え方を集約して、精緻に記録していくことである。

図７　二条大橋橋脚のデザイン

図８　二条大橋付近木屋町通りのデザイン

図９　北大路橋と河川景観

近年のバイオ災害など急速な社会の大きな変化が起き、公共事業の財政が逼迫している現状の中で、景観やデザインは一層無駄のない効率的なチェック体制やデザイナーの役割が求められる。他を捨ててもこれだけは少なくても絶対守っておかなければならない景観のミニマムの考え方や見守り体制をしっかり確保していかなければならないと改めて考える。

参考文献

1)　京都市建設局：北大路橋改修に伴うデザイン検討会議，　2004.
2)　京都市建設局：二条大橋デザイン検討会議，　2016.
3)　京都市建設局：賀茂大橋デザイン検討会議，　2015.
4)　京都市建設局：河合橋デザイン検討会議，　2018.
5)　明日の鴨川の橋を考える会：「橋のみやこづくりをめざして―明日の鴨川の橋を考える会の提言」, 2002.
6)　京都市文化市民局：明治の橋-近代橋梁の黎明，　2018.
7)　谷川陸・山口敬太・川崎雅史，昭和初期の京都都市計画風致地区における眺望に基づく行為許可と行政指導 -現状変更許可申請書(昭和6-8年)にみる京都府の風致行政-、都市計画論文集, Vol. 53，No. 3, pp.　289-296, 2018.
8)　松村　博：京の橋ものがたり, 第 9・10 章, 松籟社, 1973.
9)　中川理：京都と近代，第 5 章，鹿島出版会, 2015.